

# 友情と尊重再考 デカルトからアランへ

曾 我 千亜紀<sup>†</sup>

## Reconsideration of Friendship and Esteem From Descartes to Alain

SOGA Chiaki

### Abstract

The concepts of *amitié* (friendship) and *estime* (esteem) were previously investigated in the article *Friendship and Esteem* (*Journal of Human Environmental Studies* 14), by referring to letters between Descartes and Chanut. The goals of this article are to deepen that analysis by introducing the thoughts of Alain and by focusing on a new aspect of these two concepts, and to clarify what kind of morality is necessary for human communities and whether the morality of 17th and 20th century French philosophy is still relevant in the 21st century. In addition, the possibility of applying modern morality to the 21st century cyberspace era will be considered.

キーワード：友情，尊重，道徳，アラン，デカルト

Keywords: friendship, esteem, morality, Alain, Descartes

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 国際学部国際学科 准教授

草稿提出日 4月16日

最終原稿提出日 4月16日

## 1. はじめに

私は『人間環境論集14』に寄稿した「友情と尊重」という論考の中で<sup>1)</sup>、デカルトにおける友情 *amitié* と尊重 *estime* について考察した。本論は、前回の論考をさらに深めつつ、アランによる定義を導きの糸として、*amitié* と *estime* の新たな側面を浮き彫りにすることをその目的とする。それによって、人間の共同体にはどのような道徳が必要とされるのか、17世紀、そして20世紀におけるフランス哲学の道徳が、21世紀においてもなお通用するのか否かを明らかにする。そのうえで、近代の<sup>モラル</sup>道徳をサイバースペース時代の21世紀のそれとして甦らせる可能性を考えていく。

## 2. 「友情と尊重」のまとめ

「友情と尊重」という論考では、サイバースペースに代表されるように時空間を超えて多様な人間同士が接続可能となった現在、どのような道徳を立てるかという問題意識のもと、デカルトとシャニュの間で交わされた書簡に注目し、各々の概念について考察した。17世紀のフランスの哲学者デカルトと、同時代のスウェーデンにおけるフランス弁理公使シャニュとの間で、1647年にやり取りされた書簡のテーマは、広い意味での愛 *amour* であり、友情 *amitié* と尊重 *estime*<sup>2)</sup> に関するものである。

この往復書簡には両者の主張に一つ大きな違いが見出される。シャニュの主張は、人間である以上、あらゆる人間に対して等しく友情を持ちうる、というものであった<sup>3)</sup>。いわば人類愛とでも呼ぶべき道徳についてシャニュは考えていたのである。それに対しデカル

1) 曾我千亜紀「友情と尊重」『人間環境論集14』pp. 11-22, 2015

2) フランス語の *estime* については様々な訳語が存在する。『デカルト全書簡集第7巻』では「尊重」、デカルト『情念論』における谷川多佳子訳では「重視」、アラン『定義集』講義』における米山優訳では「尊敬」である。本論では、文脈において使い分けるか、「尊重(尊敬)」「尊敬(尊重)」のように両者を併記することとする。

3) 「私は、あらゆる人間はすべて等しく人間であるがゆえに、すべての人間に対して等しい一つの愛を基礎として心のうちに置き、ただその上のみ、様々な美徳の区別と、善き責務をやりとりする中での感謝の義務を付け加えるという、私はそういう人に賢人の名を拒みうるとは思いません」(1647年5月11日付シャニュからデカルト宛書簡(AT.X,623))

以下、デカルトからの引用はすべてアダン・タヌリ版全集 *Œuvres de Descartes, publiées par Cha. Adam et P. Tannery, Paris, 1996*による。これをATと略記し、引用に際してその巻数とページ数を示した。また書簡に関しては、*Descartes Correspondance, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 vol, Paris, 1936-1963*および *René Descartes, Tutte le lettere 1619-1650, a cura di G. Belgioioso, Milano, 2005*をも参照した。なお、日本語訳は、野田又夫編『世界の名著 デカルト』中央公論社、『デカルト著作集』全四巻、白水社、『デカルト=エリザベト往復書簡』山田弘明訳、講談社学術文庫、『デカルト全書簡集』山田弘明他訳、知泉書館、『情念論』谷川多佳子訳を適宜参考にした。

トは、同じ価値のあるすべての人間を等しく愛することはできず、等しく尊重する義務のみがあると主張していた<sup>4)</sup>。

この論考では詳細に触れなかった点について、以下、若干補足しておく。

そもそもシャニュの考察は「私は、他ならぬある人間への友情に、その利点が見える前であっても、われわれを誘う秘密の衝動が何なのか、明晰にはわかっておりません」<sup>5)</sup>という疑問点から出発していた。すなわち、「この隠された繋がりが身体に由来するのかあるいは精神に由来するのか」<sup>6)</sup>がシャニュにはわからず、その点をデカルトに確認しようとしたのである。ただシャニュは、デカルトの返事を待たず、一つの考えを展開している。それは、「人々はしばしば、一つは徳の尊重と、もう一つは実際のところ善行の売買でしかない誠実な人々相互の責務のやりとりと、この二つを友情と取り違えるのですが、この二つから友情を切り離すと、このような友情は、あらゆる人間をただ一つの全体に取り集め、単純なる結びつきあるいは絆として残る(傍点は引用者による)」<sup>7)</sup>というものであった。

どうやらシャニュは普遍的な愛あるいは絆を構想していたようである。徳の尊重と善行の売買である相互の責務を除いたのちに残るこの絆によって、人間同士が全体として一つの繋がりを実現しようという見通しを彼は持っていた。

以上のシャニュの疑問と構想に対し、デカルトは以下のように答えている。

まず、友情の原因についてデカルトは、精神に由来するものと身体に由来するものと両方あるとしたうえで、身体のみ由来する原因について詳しく述べていく。「われわれの感覚を刺激する対象は、神経を介してわれわれの脳のある諸部分を動かし、そこにある襲撃のようなものを作りますが、対象が働きかけるのをやめるとそれは消えて」<sup>8)</sup>しまう。しかしながら、「襲撃ができた部分は、その後も、前のものと全体では似ていないがある点で似ている他の対象によって、前と同じ仕方で襲撃できるようにやはり仕向けられる」<sup>9)</sup>と云うのである。

似ている対象によって脳の部分が動かされる——すなわち類似の対象がきっかけとな

---

4) 「われわれは同じ価値がそこにあると認める人をすべて等しく愛することは出来ませんから、ただかれらを等しく尊重する義務があるだけだと思います」(1647年6月6日付デカルトからシャニュ宛書簡(AT.V, 58))

5) 1647年5月11日付シャニュからデカルト宛書簡(AT.X, 622)

6) 同上

7) 1647年5月11日付シャニュからデカルト宛書簡(AT.X, 623)

8) 1647年6月6日付デカルトからシャニュ宛書簡(AT.V, 57)

9) 同上

り、われわれは以前と同じ情念を持つ。友情や愛情についても同様であって、脳にできた襞を原因としてそのような情念を人間は抱くのである。興味深いのは、デカルトが「われわれがその原因を知らずにある人を愛するようになるとき、それは、それが何であるかは分からなくとも、われわれが以前に愛したある対象にあったものどこか似ているものが、そのうちにある」と類似性に言及している点である。つまり、身体に由来する友情や愛情は類似性や共通性を基盤としているとデカルトは考える。そのうえで、「人生の主要な幸福はある人たちに友情を抱くことにありますので、われわれの秘めたる傾向が、われわれを結びつけさせる人たちを（われわれがかれらにおいても価値を見いださしえするならば）とくに好むことは理にかなって」<sup>10)</sup> いるとして、友情や愛情について肯定的に捉えている<sup>11)</sup>。

しかしながらわれわれは、われわれが価値を見出す人々すべてに対して友情を持つことはできない。つまり、たとえ価値があると自分が認める人々においても、自分との類似性や共通性があるとは限らないというわけである。したがって、かれらを等しく尊重する義務があるだけだとデカルトは主張した。

要するにデカルトとシャニュの相違は、以下のようにまとめられる。すなわち、あらゆる人間同士がすべて繋がって一つの全体を形成しうるのであり、その絆は友情によって結ばれるとシャニュは考えていた。それに対してデカルトは、あらゆる人間を等しく愛し、あらゆる人間に対し等しく友情を持つことは不可能であるが、少なくとも自分がそこに価値を認める人々を等しく尊重することは可能だと考えたのである。ある意味、非常に楽観的な理想を語るシャニュと友情の価値を認めつつも冷静な態度を崩さないデカルトが対比的である。

以上のようなデカルトとシャニュの間の議論とその問題意識は、時代を超えて、デカルト思想の継承者である20世紀のフランスの哲学者アランの中に見出すことができる。友情と尊重（あるいは愛することと尊重すること）という概念の意味するところ、両者のニュアンスの違いをさらに際立たせたのがアランである。彼はこの二つの概念をどのように定義していたのだろうか。

---

10) 1647年6月6日付デカルトからシャニュ宛書簡(AT.V, 58)

11) その一方で、デカルトは次のように付言している。「通常の場合、われわれをそのように愛するよう引きつけるものは欠点よりも完全性であるとはいえ、[...] それはときとして欠点であることがあるので、賢者たるものは、われわれが心を動かされるのを感じる人の価値を考えた後でなければ、この情念に完全に身を任せてはなりません」(AT.V, 57-58)。デカルトが身体的な愛をある程度肯定しつつも、最終的に、精神的(知性的)な愛の方に価値を置いていることを忘れてはならない。

### 3. アランによる *amitié* と *estime*

ではアランによる定義を見ていこう。少し長くなるが『定義集』における各々の定義を全文引用する<sup>12)</sup>。「友情 *amitié*」はアランにより以下のように定義されている。

#### 友情 AMITIE

これは自分に対する自由で幸福な約束である。そしてそれは自然な共感 [*sympathie naturelle*] を、前以て年齢や情念 [*passions*]、ライバル意識や利害そして偶然をも超えて、揺るぎのない和合へと変えるものである。それ [友情] は通常は表現されることがないが、その結果を人は見て取るし、それに絶対的な信頼を置いている。そしてそれはどんな策略もない会話や判断の自由を可能にする。反対に、条件付きの友情など人を喜ばすことはできない<sup>13)</sup>。

アランは友情の定義を「自分に対する自由で幸福な約束」という一文から始める。友情はまず自由で幸福なものであり、何よりも自分に関わる事柄である。そして、「自然な共感」、デカルトで言うなら身体に由来する共感にとどまっていはいけないと戒める。もちろん、友情のきっかけが共感であることは十分に可能であるし、おそらく、共感することは友情を抱くことの重要な要件でもある。しかしながら、最終的に利害関係を超えた絶対的信頼を築くことがなければ、喜びは訪れないとアランは考える。このように、アランはデカルトが触れることのなかった「信頼」<sup>14)</sup>に言及している。

次に、「尊敬 (尊重) *estime*」の定義を見てみよう。この項でもまた、信頼について語られる。

#### 尊敬 ESTIME

自分自身には帰着することのない一種の信頼 [*confiance*] である。私の尊敬する人が卑しいことなど何もしないだろうという信頼を、私は抱く。そしてそのような信頼を抱くからには、私は自分自身が有利な立場に立つとかということを考えもしないし、友情 [*amitié*] という歓びさえも考えない。尊敬というものは、それだけとれば少々冷たい感じのするものだが、卓越した事柄である。それは [人間というものを] 評価

12) アラン『定義集』(Alain, *Définitions*)の翻訳は森有正(みすず書房)、神谷幹夫(岩波文庫)のものがあるが、本論では米山優の訳(『アラン『定義集』講義』幻戯書房)にしたがった。

13) 米山優『アラン『定義集』講義』幻戯書房, p. 73

14) 「友情」の項の「信頼を置く」は *se fier* という動詞が使用されている。以下の「尊敬」の項では *confiance* という名詞が使われている。

する基準となる価値〔valeur〕をもっている<sup>15)</sup>。

尊敬(尊重)と友情が大きく異なるのは、自分自身との関わりである。尊敬は自分自身には帰着しない信頼である。友情でもまた信頼が語られたが、それは自分に対する幸福な約束でもあった。しかしながら尊敬は、友情という歓びがなくとも成立しうる。その意味でアランは、尊敬が「少々冷たい感じのするものだ」と付け加えているのである。

さて、米山優はこれらの定義についてそれぞれ詳細なコメントを付している。とりわけ、友情についてはその「意志」の側面を強調する。友情は「放っておいてもそこにあるとか」、あるいは「自然に生えてくる」といったものではなく、「意志によって成立させるもの」<sup>16)</sup>である。意志によって敢えて成立させるという点が重要なのである。人間の知性は有限であるが、意志は知性によって認識しうる範囲を超えることができる。まさに神の似姿とでも言うべき力が意志の中には見出される。米山はこれを「〈人間の高みを救い出す〉」<sup>17)</sup>という言葉で表現している。人間にとって常に同じレベルの道徳を維持したり、友人に対して常に変わらぬ深い信頼を置いたりすることは困難である。ときに友人を裏切ったり、悪い誘惑に屈したりすることもあるだろう。そのとき敢えて意志の力によって友情を保とうとし、友人を愛そうとする。これは友人の〈高みを救い出す〉ことでもあり、自分自身の〈高み〉に到達しようとすることでもある。

それは、デカルトが書簡では、議論が長くなることを恐れ詳しく展開せずに終わった身体的愛と知性的愛に関わる部分からの展開でもある。知性的に愛するということは、善きものを意志することである。それは共感から始まった友情や愛を身体的レベルで終わらせず、知性的——精神的レベルへと引き上げようとする事なのだ。

一方、尊敬 *estime* は「自分自身には帰着することのない一種の信頼〔*confiance*〕である」とされていた。友情は自分に対する約束であったが、尊敬は他者に対する信頼なのである。米山優は次のようなコメントを付している。滅多に起こるものではないが「高度な信頼だけが『奇蹟(MIRACLE)』を生み出す」のであって、「だからこそ人は普通、そこまでの信頼を他人に置かない」。したがって信頼は普通「〈自分自身に帰着してしまう〉」ものに過ぎず、自分の利益から離れることはない。しかし稀に私たちは「高度な信頼に出会う」ことがあり、そのような信頼に「感動」する。例えば、ある卓越した作品を発表した芸術

15) 同書, p. 326

16) 同書, p. 75

17) 同上

家に対し、自分が尊敬の念を抱くとしよう。ところが、その作品に続く作品群は評価に値しないように思われ、多くの人がその芸術家が今後価値ある作品を生み出すことに疑問を持ち、もはや期待しなくなってしまった。そのとき、自分だけはその芸術家に対して信頼を持ち続けようとする。それは、今後もその芸術家の〈高み〉を信じることであり、自分の利益とは一切関係しない、他者への尊敬である。

この点に関して米山は、『レ・ミゼラブル』の例を挙げている<sup>18)</sup>。前科者であっても敢えて信頼を置くということもまた、尊敬である。それゆえ、尊敬は厳しく「それだけとれば少々冷たい感じのするもの」なのである<sup>19)</sup>。このように他者を尊敬することは、自然な共感や自分との類似点から出発するものではない。友情と同様、信頼が大きく関わってくるが、尊敬とは自分とは全く異なる人間を尊重することなのである。尊敬とは、自然な共感、身体的愛を介さずとも成立する。

#### 4. 不気味な他者を尊重すること

アランは、『芸術に関する101章』において「欠かすことのできない相違点ゆえに生まれる友情は、なんと快いものだろう」<sup>20)</sup>と述べている。また『人間論』においては「愛されるにも、感嘆されるにも、道は一つしかない。すなわち、自由な者をのみさがし、尊ぶことであり、抵抗するもの、反対するものを愛すること」<sup>21)</sup>とも述べている。

互いに異なることによって友情も成り立ち、グループや共同体も成立し、存続する。相手が完全には理解できず、常に何らかの謎を残しているからこそ、人々はコミュニケーションを試み、共にあろうとする。ただしそれは、共感や共通点を基盤としているから成立するコミュニケーションであるとも言える。すなわち共感や共通の基盤を出発点とするからこそ、互いの相違を際立たせ、それを魅力的なものとするができるわけである。

友情を論ずる際に、「相違点」に言及するアランは、友情とは相手を自分と似た者にすることとは考えない。相違があるからこそ友情が快いというアランの中には、他者のうちにある自分とは異なる点を積極的に評価するという思想がある。この思想をさらに推し進めると、他者に対する尊敬(尊重)へと行き着く。なぜなら尊敬とは、自分の利害を超えたところで成立する信頼だからだ。しかも他者を尊重する際には、他者との間に共通の基盤は必要ない。他者の中の相違点を愛するどころか、自分とは全く異なる他者であっても

---

18) 米山優, 前掲書, pp. 326-327

19) 同書, p. 327

20) アラン『芸術に関する101章』p. 213

21) アラン『人間論』p. 218。注20および注21は米山優による指摘を参考にした。

尊重することが可能である——もしその他者を評価しうるのであれば。

デカルトも、そしてアランも、シャニユとは異なり、すべての人間を相手に友情や尊敬(尊重)が成立しうるとは考えていない。なぜなら意志によって可能となる友情、身体的レベルにとどまらない友情という情念を、あらゆる人間に対して持つことなど不可能だからである。また、自分が評価できない相手を尊敬することもできそうにないからである。あらゆる人間を相手にして「卑しいことをするはずがない」という信頼を置くことは不可能だろう。

しかしながら、デカルトとアランの「友情」と「尊重(尊敬)」は、他者における相違点を評価し、自分とは類似点を持たない他者を重んじるがゆえに、人間の共同体における道徳として機能しうる。とりわけ「尊重(尊敬)」は、友情という快さがなくとも成立し、自らの理解を超える者を尊重しうるという意味で重要である。ただし、やはり「評価」に関わる事柄であるため、人間全体に対して等しく適用することが可能かどうかは疑問である。デカルトが「同じ価値がそこにあると認める人」という限定をするとき、アランが「私の尊敬する人が卑しいことなど何もしないだろう」と言うとき、そこにはやはり評価が関わっている。

ではどのように共通点のない他者を「評価」するのか。少々まわり道になるが、以上の考察を、人間の共同体における道徳の議論として捉え直すことによってその解決を探ってみたい。不快な隣人や得体の知れない他者がそこにいる。この事実をどのように受け止め、どのような対応をし、そこにどのような道徳を成立させるかという問題である。この問いに対しては、大きく三つの可能性が考えられるだろう。

一つ目は、彼/彼女らを存在しないものとして扱うことである。不気味な他者とは徹底して関わらない。彼/彼女らを自分の世界の中に導き入れようとはしない。よく言えば棲み分けようとするわけであるが、もし得体の知れない者たちが自分たちの世界を脅かすようになれば、徹底して排斥することになるだろう。

二つ目は、不気味な他者とのコミュニケーションを試み、何とかして共通点を見出し、共に生きる世界を新たに創り出そうとする可能性である。先の方法が徹底して関わらない態度を取るのに対し、こちらは可能な限り他者と関わり続け、相互理解を目指すわけである。ある意味で非常に道徳的な態度であると言えよう。

三つ目は、先の二つとは異なり、彼/彼女らが存在すること、彼/彼女らがそこにあることは認めるものの、共通点を探したり完全なる理解を目指したりということはしない<sup>22)</sup>。つまり友情をそこに見出そうとはしないわけである。ただ不気味な他者の存在を抹

22) 完全に異質で他なる者の由来は、たとえばデカルトにおける神の概念である。レヴィナスは『全体

消しようとはしないという意味でぎりぎりの道徳を保っている。

一つ目は、まさに今現在起こっている事態である。この混乱に解決策を与えるのが二つ目と三つ目の可能性である。そして、二つ目の可能性は、デカルトやアランが考えた友情に相当する。より正確に言えば、デカルトの言う友情を全体に押し広げようとするという意味で、シャニュの理想と同義である<sup>23)</sup>。三つ目の可能性は、尊重(尊敬)に当たる。相互理解を夢見て他者との共通点に安住することを禁ずるという意味で、実は最も道徳的なのである。

そもそも私たちは、自分たちのコミュニティやグループに他者が侵入する事態を想定する傾向にあるが、自分自身が他者や不快な隣人として別の共同体に入っていく可能性を考えることは少ない。重要なのは、自分が誰かにとっての他者であるという視点を持ち、自分自身が異質で不気味な者でもありうるという可能性を常に念頭に置くことである。異質な者 *étranger* には誰もがなりうる。この意味において他なる者とは入れ替え可能な存在なのである。

不快な隣人や得体の知れない他者に対して友情を持つことは難しいように思われる。なぜなら、友情が、たとえ相違を認め相違を楽しむことにおいてあるとしても、自分と共通項を認められない人々に対して親しみを感じることは困難だからだ。友情の中に、アランの言うように、ある種の「快さ」があるのだとすれば、それは不快や不気味さとは対極にあるものである。

一方、尊重は友情とは別の次元の「情念」であり態度である。他者が、自分とは異なる信条や趣味嗜好を持っていたり、異質な宗教や思想に耽溺していたりしたとしても、彼／彼女らを尊重することはできる。自分はそのような考えを持つことはなく、相手に賛同するどころかむしろ反対であったとしても、あるいはそのような考え自体が全く理解の外であったとしても、彼／彼女らに価値を認め、尊敬することは可能なのである。

不気味な他者、不快な隣人たちと友人となろうとする必要はない。彼／彼女らが存在することを認めればそれで良いのである。さらに言えば、フランスの思想家ピエール・レヴィの言うように、彼／彼女らが自分の知らない何らかの事柄を知っているだけで十分存在に値する<sup>24)</sup>。すなわち、他者を何かを知っている者(あるいは何かを学ぶ者)と捉え直すだけで、自分には理解不能な存在者に価値が与えられるのである。私自身がそうである

---

性と無限』においてデカルトの神概念を展開して「他者」を論じたが、それは人間によって完全に理解しうる範囲を超えた存在である。

23) コミュニケーションによって相互理解が可能である点において、ドイツの哲学者ハーバーマスとも同じ思想を共有している。

24) ピエール・レヴィ『ポストメディア人類学に向けて』p. 33

ように、他者もまた自分なりの理路や知識を持っている。その場合、その他者が理解しがたいことそれ自体が、さらに言えば謎であることそれ自体が、他者の存在価値となる。他者を尊重することは、不気味で不快な者たちを自分自身の理解や知識の枠組みからはみ出す者と見なすことで担保されるのだ。

## 5. おわりに——21世紀の道徳として

以上のような17世紀、あるいは20世紀のフランス哲学における友情と尊重という思想は、21世紀に生きるわれわれに対して何をもたらしてくれるのだろうか。

不気味な他者、共通点のない隣人を軽視せず、尊重しようという点で、デカルト－アランの道徳は救いとなる。シャニュの構想した人類愛やあらゆる人間をつなぐ絆といったものは、21世紀現在、もはや信じることは困難である。しかしながら、すべての人間を愛する必要はないが少なくとも、その価値を認めうる人々を尊重すべきであるというモラルは、時代を超えてなお復活しよう。

デカルト－アランの道徳は、〈その価値を認めうる人々〉をどのような基準で設定するかにかかっている。すなわち、たとえ私が理解できない人々であっても、あるいは私の理解を超えているというまさにその事実によって、彼／彼女らが存在する価値を認め、そのような存在を尊重すると言い替えうるのであれば、この道徳は21世紀のそれとして甦らせることができるだろう。レヴィが他者を「何かを知っている者」と規定するとき、デカルト－アランの道徳はサイバースペースの中で甦る。そのとき、サイバースペースにおいて可視化されるようになった不気味な他者たち、自分にとって不快な隣人たちは、その存在を許される。それは、翻ってまた、誰かにとって不気味で不快である自分の存在が許されることでもあるのだ。

## 参考文献

Alain

－*Définitions*, Les Éditions Gallimard, 1953 (『定義集』 森有正訳, 所雄章編, みすず書房, 1988年, 『定義集』 神谷幹夫訳, 岩波文庫, 2003年)

－*Esquisses de l'homme*, Les Éditions Gallimard 1927= 4<sup>e</sup> édition, 1938 (『人間論』 原亨吉訳, 白水社, 2007年)

－『芸術に関する101章』(『世界教養全集12』 斎藤正二訳, 平凡社, 1962年)

Descartes, R.

－*Œuvres de Descartes*, publiées par Cha. Adam et P. Tannery, Paris, 1996

- *Descartes Correspondance*, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 vol, Paris, 1936-1963
- *René Descartes, Tutte le lettere 1619-1650*, a cura di G. Belgioioso, Milano, 2005
- 『情念論』 谷川多佳子訳, 岩波文庫, 2008年
- 『デカルト全書簡集』 第七巻 (1646-1647) 岩佐宣明・山田弘明他訳, 知泉書館, 2015年
- Habermas, J., *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, H. Luchterhand Verlag GmbH, 1962 (ユルゲン・ハーバーマス 『公共性の構造転換』 細谷貞雄訳, 未来社, 1973年)
- Lévinas, E. *Totalité et infini: essai sur l'extériorité*, 4<sup>e</sup> édition, Nijhoff, 1971 (エマニュエル・レヴィナス 『全体性と無限 (上)』 熊野純彦訳, 岩波文庫, 2005年)
- Lévy, P.
- *L'intelligence collective*, La Découverte, 1994 (ピエール・レヴィ 『ポストメディア人類学に向けて——集合的知性』 米山優・清水高志・曾我千亜紀・井上寛雄訳, 水声社, 2015年)
- *Qu'est-ce que le virtuel ?*, La Découverte, 1995 (ピエール・レヴィ 『ヴァーチャルとは何か?』 米山優監訳, 昭和堂, 2006年)
- Authier, M. et Lévy, P., *Les arbres de connaissances*, La Découverte, 1998
- 米山優 『アラン 『定義集』 講義』 幻戯書房, 2018年